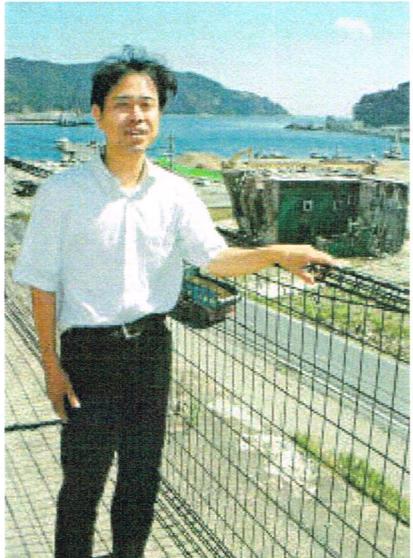


## 河北新報のニュースサイト・コルネット

特集

## (32)「復興を見届けるまで」／コンサルタント会社主任技師・今道洋さん



市職員を辞め、大阪から仙台に来た今道さん。「津波被災地の復興を見届けたい」と語る=宮城県女川町

古里を離れてでも被災地で働きたい。大阪府枚方市職員だった今道洋さん(35)はことし4月1日、こんな思いを抱いてレンタカーを運転して仙台に来た。市役所は3月末で辞めた。新しい仕事は決まっていなかった。家族に強く反対された。それでも自分の気持ちは抑えられなかった。転職サイトを利用し、6月に仙台市のコンサルタント会社に入社した。担当は宮城県女川町の復興事業。方言に戸惑いながらも、被災者からの聞き取り調査などに取り組む。

## ◎大阪の公務員生活捨て被災地勤め

## &lt;帰宅は深夜に&gt;

「住民と直接対話できる仕事なのでやりがいがある。震災発生から1年半が過ぎたけど、しんどい人はまだたくさんいる。力になりたい」

今道さんは日焼けした顔で語る。

仮設住宅で暮らす人に、今後の居住地の希望などを尋ねるヒアリング業務に携わる。面談中に泣き出す人。不安や悩みを抱えながらも前を向こうとする人。「こんなに大変なこともあるのか…」と思い知らされる毎日だ。

勤務する復建技術コンサルタント(青葉区錦町)から女川まで車で片道1時間半。朝は早い。帰宅が深夜になることも珍しくない。被災地と向き合う日々が続く。

## &lt;家族から反対&gt;

東日本大震災の巨大地震が発生したとき、枚方市役所上下水道局庁舎にいた。所属する下水道整備課は2階。長周期の大きく不気味な揺れが続いた。静まりかえった職場に、ブランドが窓を打ち付ける音が響いた。

阪神大震災のときは下から突き上げられる揺れだった。「遠くで大きな地震が発生したに違いない」。パソコンで情報を探す。東北地方の太平洋側を震源に巨大地震が発生し、沿岸部に大津波警報が出ていることを知った。

新聞は連日、震災で亡くなった人たちの名前と年齢などを伝えた。今道さんの長女は小学校の入学を控えていた。犠牲者の中に長女と同じ年齢の子どももいた。

ピカピカのランドセルはもう手元にあっただろう。机を買ってもらっていたかもしれない。高校や大学を卒業し、4月から人生の新しいステージに立つ人もいたはずだ。見知らぬ人たち

の無念さが深く胸に刻まれた。

「被災地で働きたい」。ニュースを見るたびに、そう思い続けてきた。下水道整備課から被災自治体への派遣枠は2人。派遣を希望したが被災自治体から依頼はなかった。

「市役所を辞めて仙台に行く」

腹を決めたのは年明けだった。4人目の子どもを身ごもっていた妻の同意は得られなかつた。両親にも強く反対された。

#### <決心揺るがず>

今道さんは大学で土木工学を学び、大学院に進学。修了後、大阪の建設コンサルタント会社を経て、2004年枚方市役所に入った。就職難の時代、公務員は人気職種だった。それでも決心は揺るがなかった。

何も決まっていないのに仙台に来たのは、大阪にいたままでは就職活動ができないと感じたからだ。企業の面接を受けようにも、東北は遠い。仙台を拠点にして復興に役立つ仕事を探そうと考えた。

女川に通って4カ月余り。水産加工工場や住宅が立ち並んでいた町中心部のがれきが、ようやく片付いた程度。住宅地や道路の整備など新たな基盤整備事業はこれからだ。

「何かと大変だけど、仙台に来ていなかったら将来後悔していたと思う。女川だけでなく、被災地の再生と復興を見届けたい」。口元には強い決意がにじんでいた。

2012年10月06日土曜日

Copyright © KAHOKU SHIMPO PUBLISHING CO.